

## 「いばらの道 ①」

明星学園 宮下 智

彼の行く道はいつも険しい。右の道を選んでも苦しいし、左を選んでも、それはさらに厳しい道なのだ。彼の想いは、いつでも「でも」の連続の中で、堂々巡りだ。

「帰省してお母さん会いたいな」、でも「お母さん、時々鬼のように怒るからおっかないな」、でも「お母さんに会えないのは、寂しいし…」、でも「怒られるから帰りたくない、なんて言ったら、きっと嫌われちゃうよな、そんな子はもう帰ってこなくていい！なんて言われそうだし…」、でも「なかなかお母さんも良いところあって、ご機嫌な時には、やさしいんだよな、いろいろ買ってくれるし…」、でも「僕の本当に嫌なことちっともわかってくれないのが悲しいんだ、帰省した時に、毎日のお経に正座しておつきあいはとてもごめんなんだけど…」、でも「あなたのためにやっているのよって言われるとイヤって言い難いし…」、でも「必ず学園の行事とかには来てくれるし、嬉しいんだよな、僕のこと忘れていないんだって安心できるよ」、でも「こんなおつきあいの大変な僕をいつも大切にしてくれている職員の人たちに、ガミガミ言っているのを聞くと、来なければいいのになんて思っちゃうんだよ…」彼の悩みは尽きることがない。

家族から離れて、入所していれば、それは寂しいに決まっている。けれどその戻るべき心の故郷であるはずの実家が、そして母子関係、家族関係が彼にとって安心と安全の地でなかったなら、彼の選ぶべき道は、常にいばらの道である。

帰省中に、夜中に冷蔵庫の納豆を漁って食べて、母親にこっ酷く叱られた後、彼は給食の納豆を食べるたびに下痢をした。怒られ不安が下痢を生じさせていると考えた僕らは、彼を応援して、母親に「怒られてイヤだったんだよ、糖尿病のことを心配して怒ってくれたのはわかるけど、あんなに怒らなくてもいいと思うんだけど」と、今まで伝えられなかった辛い思いを伝えた。彼の下痢はこれで止まった。

学園での面会中に、母親からの苦情に涙がこぼれた担当職員に、母親が帰った後、彼はその担当職員の名前を連呼して「〇〇が悪い！」と大声で叫び続けた。僕たちは彼に「あなたがやさしい心の持ち主なのは良く知っているよ、悪いのは〇〇さんじゃないよね。お母さんがいろいろガミガミ言っている時に、それを止めることができなかった自分が一番悪いと思っているんだよ。担当職員の味方になれなかった自分を一番責めているんだよ、そんなに自分を責めなくても大丈夫、あなたの気持ちは、みんなわかっているから、悪いのはあなたじゃない！」これで彼の大声の連呼は止まった。

本当の気持ちが通じれば、彼の反復強迫的な行動は止まる、これが彼が自分自身で僕らに教えた彼の人生の教則本だ。

ある帰省中に彼は荒れに荒れた。対応に根を上げた母親が学園への帰園を願い出していた。暴れて手が負えなくなったら学園に帰園させる、そんな懲罰のような場所に学園がなるのを防ぐために、僕たちは、母親同伴での一時帰園を提案した。

彼は出迎えた僕たち前で、大声を上げて「〇〇くん」と叫び続けた。その名を知らない僕たちは母親に訊ねた。「〇〇君は、家の近くの子で、養護学校、ずっと一緒だったんです。うちの子は、字が書けないし、数もじょうずに数えられないけど〇〇君は、字も書けて数も数えられるし、うちの子にもそうなって欲しいと思って、カップラーメンを食べる時に100まできちんと数える練習をしたりしました。」

母の語る〇〇君のその話を聞きながら、彼は「イヤだったんだよ～」と泣き声を上げた。

ずっとずっと比べられ続けてイヤだったことを彼は初めて母親に伝えることになったのだ。頑張り続けられない自分、当に昔、自分のキャパを越えてしまっている努力の量、しかし、良かれと思って、それが将来の息子の姿に役に立つと信じて数を教え続けている母親に彼はずっと「イヤ」とは言えなかったのだ。

彼の悲痛な心の叫びを、「ごめんね、もうしないよ、比べてばかりでごめんね、あなたはあなただものね、字が書けなくても、数が数えられなくても大好きだよ、お母さんが悪かったよ」と母親が受け止めてくれた途端、彼の泣き声は笑顔へと変わった。

こうして、車中暴れて学園にやって来た彼は、人が変わったように今度は笑顔で実家に帰省して行くことに

なったのだ。

本当の気持ちさえ伝われば、彼の攻撃的な行動は止まる、これも彼が教えた彼の真実だ。

彼は、飲み物と言えばコーラ、食べ物と言えば握り寿司の人だった。が、現在彼の大好きな飲み物は、ミルクティーとカルピスだ。そして握り寿司は食べずピザを食す。

彼が、飲み物としてコーラを選んだ時、母親は「骨が溶ける、健康に良くない」と大反対だった。そして、「コーラを飲ませないで下さい」が職員へのお願いだった。また、握り寿司を選択したときも「生ものを食べてお腹をこわしたらどうするんですか！」と大反対だった。結局は、コーラは飲む量の上限を決めることで、握り寿司は購入の後、必ず冷蔵状態で移動、保管することで、母親の了承を得ることができたのだったが、母親の反対を押し切るという大きなエネルギーを使ってまでして、彼のしたかったことは、母親の「コーラは骨を溶かす」、あるいは「生ものはお腹をこわす」という価値観の中で、これからも暮らしていくことを拒否するためだったのではないかと思うのだ。そして、そのプロセスを経て、本当に好きな物、ミルクティーやピザに辿りつくことができた彼がいるのである。

最初は反抗のための反抗と思われる行動が、実は自立のための第一歩であり、本当の気持ちにたどり着くまでの必要条件であることを彼は、僕たちに教えたのである。

彼は次第に母親との学園での面会も拒否するようになった。今度は母親の方が寂しくなった。彼は、ファミレスでの外食を母親に提案して、了承を頂いた。そんな時、母親が急に事故で亡くなった。彼は、母親を事故で亡くしたとき、母親のお墓に近づくことができなかった。居室に母親の写真を用意することも拒んだ。「寂しいから写真を飾りたい」、でも「そこにはおっかないお母さんが写っている」、飾っても飾らなくても、どちらの道もいばらの道、飾ってもおっかないし、飾らなくても、また怒られるような気がしておっかない、心はそこで引き裂かれ、攻撃的衝動が噴出してしまう。

僕らは、写真を飾らない、墓参りには行かない道を応援することにした。どちらの道を選んでも、僕らはいつもその選ばれた道の応援団なのだが、進むべき道の岐路で、完全に立ちつくしてしているその人に、本当の気持ちの在りどころを探りながら、その本当に進みたいと願っているだろう道の方に肩をちょっと押すような、そんな支援方法だった。

「お母さん、急に亡くなって、まだ伝えたいことが一杯あったのに、伝えることができなくなっちゃって辛いね。聞きたいお話しも一杯あったよね。写真を飾りたくないっていう気持ちは、とつてもわかるよ、お墓参りに行かないという気持ちもよくわかる。確かに、お母さんの写真を飾りたくないと思っている自分は絶対にお母さんに怒られるような悪い子だしね。」

「どう？こんなやり方をしてみない？しばらくの間、お墓参りを止めてみよう。いつかはきっと本当に会いたいという気持ちでお母さんのお墓に行くことができる、そんな時が絶対来ると思うから。それまでお母さんのいない寂しさは、明星で何とかしていこう、職員全員で応援するよ、どんなことができるかなあ？教えてくれない？」

悲痛な叫び声の合間に、彼の本音がチラチラ伝えられる。「園長さんと散歩…」「みんなを呼んでクリスマス…」「園長のお家…」「みんなを呼んで誕生日…」

残念ながら、彼にはゆったりくつろぐことができた家族団欒の経験が乏しい。母の死を乗り越えていくのに、特に否定的な母親像（シンデレラの魔女のような）を乗り越えていくするには、温かな家族ごっこが必要なようだ。それを彼が教えている。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>